

じやりみち

……被災地支援情報……

第94号 発行日 2010.11.11
被災地NGO協働センター

〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10

tel : 078-574-0701 fax : 078-574-0702

URL <http://www.pure.ne.jp/~ngo/>

e-mail ngo@pure.ne.jp

口座番号 : 01180-6-68556 (郵便振替)

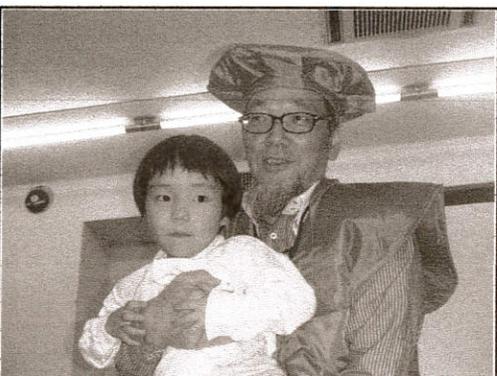
～2010年度事業計画基本方針～



上：静岡県の東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク広域図上訓練の様子

中：インドネシアからいらっしやったエコさんと竹細工にチャレンジ（佐用町笹ヶ丘荘にて）

下：村井雅清さんと鈴木隆太さんの息子の然（ぜん）ちゃん。（村井さん還暦パーティーにて）



阪神・淡路大震災から15年を迎える少し前の9月、日本において長きにわたって続いた自民政権から民主党政権に交代し、鳩山前総理が誕生した。同総理は、15年目の1月17日に阪神・淡路大震災の被災地に立ち、さまざまなことを感じ、その後の政策にも反映させようと努力もされた。その代表的な表現が「新しい公共」のようだ。15年前、阪神・淡路大震災の被災地では、一人ひとりの人間がお互いを支え合い、認めあい、人間として生きていて良かったということを経験した方が多かったが、同総理はその一人ひとりの振るまいを新しい公共の一つだと確信されたようだ。その後2010年6月鳩山政権が倒れ、菅直人新総理になり、初めての国政選挙である参議院選挙に臨み、過半数の議席を獲得できず、厳しい政権運営の一步を踏み出した。菅直人新総理は、前総理が掲げた「新しい公共」の実現に向けてはそのまま踏襲している。菅直人新総理に交代後、「新しい公共」に対して「政府対応案」が発表され、また続けて防災白書が発表され、地域防災力の強化の必要性が強く唱われた。

15年前から、いのちがけで勝ち取ってきた「被災地の公共」が、いまこうして広く社会に浸透しようとしている。感慨深いものを感じるのは、私たちだけではではないでしょう。

思い起こせば、あの時「新しい市民社会を創る力を養おう！」と宣言し、被災地から障がい者市民の芽が生まれ、多文化共生と誰もが口に出すようにもなり、市民主権の姿があらわら感じることができ、その担い手として確実にボランティア・NPO・NGOの力が培われてきた。また新政権のもとで発足した「障がい者制度改革推進会議」は、24人の委員の内15人が障がい当事者であるという事例を見ても、当被災地NGO

協働センターの基本方針で毎年のように大切なメッセージとして確認してきた「大切なことは自分たちで決める」という実践が、やっと具体的に行われるようになってきたといえる。

さて、私たちはこの15年間「公共」についての十分な議論はできてなかった。いや、「公共移動白書」を創ろうという提案はされたことがあるが実現しなかった。とはいえ、もちろんボランティア・NPO・NGOが各々のフィールドで実践してきたことそのものが公共の具現化でもあるのだが、そのことがまだまだ世間の中には浸透して来なかったことも事実だと思う。

そういう意味では、ここまで15年かかったけれども、冒頭で触れたようにいのちがけで勝ち取ってきたさまざまなことも、そうした一人ひとりの振るまいと向き合いながらも、この被災地からいまこそ「公共とはなんぞや！」というものをもう一度発信する必要があるのではないかと痛感する。

文化的にも、経済的にも、社会的にも、ともすれば個を見失うような社会情勢であるが、だからこそいま一度お互いが支えあい、助け合わなければならない情勢だといえる。毎年のように、当センター基本方針に掲げてきたことではあるが、もう一度15年前に「痛みの共有」から得た「最後の一人まで救う」というメッセージを確認し、一歩一歩踏み出したい。

昨年基本方針で
-15年前の阪神・淡路大震災がもたらした「ボランティアが社会を変える」第2ステージに入ったとも言えるのではないか。だからこそ、「いま」が大切であり、あらためてあの時の「いま」とあれからの「いま」とに丁寧に向き合い、将来の「いま」を具現化するためにとりあえずこの1年と向き合いたい。－
と掲げさせて貰った。このことは今年も同じ思いであることをつけ加えておきたい。

2010年度 被災地NGO協働センター 総会報告

2009年度事業報告

○寺子屋事業

2009年度は阪神・淡路大震災から15年を迎える節目の年でもあったので、特に被災地では関連の催しが多彩であった。当センターも関連の震災15周年記念事業助成金を得て「災害ボランティアと復興支援」というテーマを設定し、以下のように市民寺子屋を企画し開催した。平行して、当センターに9年間在籍し、その後新潟県中越地震の被災地に3年間住み、いよいよ僧侶（曹洞宗）の道に進まれる鈴木隆太（大覚和尚）に、入山前の心境も含めて当センターに関係する若者との「語り場」を開催した。

- ・鈴木隆太と語る会～僧侶としての修行の前に～ (9/6)
- ・市民セミナー寺子屋

第1回 (2/25) 講師 鈴木隆太「阪神淡路から中越へ」
第2回 (3/1) 講師 宇田川規夫「どの子ども地域で生きていく」
第3回 (3/22) 講師 矢野正広「とちぎから中越・宮城へ～災害ボランティアと復興支援～」

○まけないぞう事業

2004年の新潟県中越地震、2007年の新潟県中越沖地震、同年能登半島地震、2008年の宮城・岩手地震、2008年中国四川省地震などで、「まけないぞう」が再注目を浴びた感もあり、2009年度の販売目標も久しぶりに1800頭と立てた。結果的には目標に及ばなかったが、約1200頭は販売できた。もちろん、販売成果のみを目標にしているわけではなく、「まけないぞう全国大会」（仮称）なるものの開催の話題もでていけるほど、実質被災者の自立および生計支援として再び復興過程におけるテーマになる可能性がでてきたことはつけ加えておきたい。

- ・実績：1198頭出荷、120頭寄贈

○災害救援事業

1) 国内災害に関する救援・復興・提言活動

ここ数年顕著になっている集中ゲリラ豪雨の発生が気になっていた。そこに2009年台風9号の影響により山口県防府市、岡山県美作市、兵庫県宍粟市・佐用郡佐用町・赤穂郡上郡町などに甚大な被害をもたらした。当センターはいち早く現地（上郡町・佐用町）に入り、ボランティアセンターのサポートはじめ泥カキや清掃ボランティアなど救援活動を展開し、また約1週間後に、足湯ボランティアも避難所となった宿舎に派遣した。さらにボランティア・バスは平日に述べ4台派遣した。なお足湯隊は先の防府水害にも派遣した。その後、佐用町での活動は震つな・西濃運輸・日本財団などからご支援を受けて全国60ヶ所から集めた炭を床下に入れる作業を展開した。この活動は、震つなはじめNNAD（日本災害救援ボランティアネットワーク）、中越復興市民会議、京大・阪大・関西学院大学など学生有志とネ

ットワークしながら展開した。炭は脱臭・消臭・空気洗浄・調湿などの効果があり、被災者には大変喜ばれた。被災者の一人は「こうして全国の人たちが私たちのことを心配してくれているとは・・・」と涙ながらに感想を述べていた。この活動がきっかけとなり、佐用町で炭焼きを始めることになり、被災者でもある職人達が元気になってきた。またこの水害後の炭焼き活動が近隣にも注目され「市川を美しくしよう会」（姫路）ともつながったことは大いに評価できることだと思う。

さて、水害の根本原因は山林の放置であり、荒れ放題の竹林もその遠因である。竹炭づくりは減災活動につながると認識するとともに、一方で山林放置の現象として5年前からの風倒木放置などが間接的原因であることから、近い将来は木材の利活用として、木炭づくりにも挑戦しなければならないということに気づき準備をしてきた。なお、足湯隊はその後も佐用町に入り続けている。

また、2007年以来関わってきた能登半島地震の被災地には、「お熊甲まつり」の神輿担ぎの助っ人や足湯ボランティアで関わり続けてきた。その他の被災地にも震災がつなぐ全国ネットワークを通して復興支援を継続している。

また、5年前から関わり続けている「東海地震に備えた災害ボランティアネットワーク広域図上訓練（静岡）」は、被災地内外の連携と広域のネットワークづくりとして大きな成果をあげている。

2) 海外災害に対する緊急救援活動とその後の復興へつなげる支援活動

当センターはCODE海外災害援助市民センターの事務局をサポートしながら、震災の経験を伝え、痛みの共感をし、お互いに学び合い、海外の災害救援を通して、支えあいの輪を広げてきた。

○提言・ネットワーク事業

2010年1月17日が阪神・淡路大震災から15年目の節目であったことも影響し、マスコミやいろいろな刊行物を通して提言・発信の機会があった。民主党・鳩山前総理が2010年1月17日に阪神・淡路大震災の地を視察されたことから、「新しい公共」の息吹きを体感し、その後の所信表明演説にも阪神・淡路大震災に触れているのは、こうした被災地からの多くの提言の成果だと言えるだろう。

主に「災害ボランティアの役割」について、何度かメディア提言をさせて頂いた。また各地で講演する際には、阪神・淡路大震災の経験と知見にもとづき、ボランティアの役割について話しているので、ネットワークづくりと共に提言活動にもなっていると認識してきた。ネットワークの充実を図る活動では、従来通りいろいろな組織や団体に委員として参画することも含めて、積極的に関わってきた。

2010年度事業計画

○寺子屋事業

昨年度は阪神・淡路大震災15年ということで、ボランティアシリーズを3回開催した。今年度は、基本方針にもあるように「新しい公共」を意識した内容の寺子屋を開催したい。

関連してまずは、2010年防災白書で強調されている「地域防災力の強化」に関連して、担い手の一つである「災害救援ボランティアについて」学びたい。海外における災害も後を絶たない現状の中で、ますますシームレスな「減災サイクル」の実践的学びが求められている。このことは国内においても同じことがいえ、あらためて「減災サイクル」を確認していきたい。

- ・2~3回開催予定
- ・5月29日 「鈴木隆太さんから若者へのメッセージ」
講師 鈴木隆太 (参加者10人)

○まけないぞう事業

大げさに言えば、ここ数年で再ブレイクした「まけないぞう」現象は、今年も続きそうで、震災がつなぐ全国ネットワークの事業として「まけないぞう全国大会」が提案されている。災害被災地の復興シンボルの一つとして注目を集めているので、今一度販促や普及に努めたい。

*販売目標 1500頭 (2009年度 約1200頭)

○災害救援事業

日本列島は梅雨明け宣言し、1ヶ月以上の乾燥時期を経て台風シーズンを迎えるため、その後の地盤に対する影響が心配されるが、幸い今年度は大規模災害は発生していない。名古屋では、東海水害10年を迎えあらためて防災・減災への取り組みに力を入れている。

さて前年度に続いて、当センターが事務局を努める「足湯ボランティア活動」は、主に能登半島(2007年地震発生)・兵庫県佐用町(2009年水害発生)などと地震や水害の被災地に出かけている。同足湯ボランティアは、今年から神戸学院大学を初めとする「ポアイ4大学連携事業」として、佐用町へ20人から30人の大学生(神戸大学、神戸女子短期大学、神戸学院大学)が年間4回入る。また「中越・KOBE足湯隊」には、これまでの神戸大学足湯隊の他に関西学院大学ゼミ生が3名参加し広がりを見せ始めている。足湯ボランティアがもたらす効果は、いまさら言うまでもないが被災高齢者にとっては心身のリフレッシュになっている。他方注目すべきなのは、災害被災地でない地域からの足湯講習の依頼も徐々に増え、例えば西宮の都市生活協会で足湯実習を行い、組合員さんからは、「日ごろの介護事業にも採用できるね!」と感想を貰っているほどである。

また佐用町の復興支援として、水害の遠因ともなった竹林の整備の一つとして竹炭づくりを継続しており、今年度は「全国学生炭焼きコンクール」の開催を予定しており、このことで地元の上月竹炭組合の職人達が

大変元気になって、日々の生活に充足感を味わって下さっている。佐用町水害から1年を迎えるが、いよいよ水害被害の拡大を招いた山林整備の活動に関わることになる。これは地元の地権者(山の所有者)はもちろん、佐用町社会福祉協議会とも連携しながら、足湯や竹炭づくりで通っている阪神間の大学生や水害後同町と交流のある県立舞子高校生なども加わり、本格的に間伐と風倒木片づけ作業に入る。こうした同町の山林整備の活動に「住友ゴムCSR基金」の助成金および毎日新聞社とコラボレーションする形で、国土交通省国土緑化推進機構の事業として応援を受けて進める。また、静岡県で開催している(今年で6年目)「東海地震などを想定した広域連携図上訓練」のリーダー的役割として今年も参画する。なお、今年も災害が発生すればいち早く被災地に駆けつけ、これまでの経験を活かすつもりである。この取り組みは減災サイクルという「事前の備え」である。

また例年のように、CODE海外災害援助市民センターの活動をサポートする。

○提言(アドボカシー)・ネットワーク事業

今年は、特筆すべき提言活動として上げられるのは、民主党新政権のもと発足した「新しい公共円卓会議」に提言する「新しい公共を考える市民キャビネット・災害支援部会」のシンポジウムに登壇することである。そもそも昨年度同キャビネットが発表した第1回提言に提言案を書いたことがきっかけとなっている。また今年度新たに発足した内閣府の「防災ボランティア活動の広域連携に関する調査・意見交換」に委員として参画し、阪神・淡路大震災はじめこれまでの国内外における災害救援の経験から積極的に発言し重要な提言として受け止められている。加えて、静岡県で開催している「災害ボランティア養成講座」(年間6回)をはじめ全国各地で開催されている同種の講座で阪神・淡路大震災の経験と知見を伝えると共に、減災サイクルの必要性を訴え続けている。

中でも名古屋市天白区の住民主体の避難所運営講座には毎年講師として招かれているが、同区の取り組みは全国でもベストプラクティスに値するほどである。

ネットワーク事業については、「震災がつなぐ全国ネットワーク」をはじめ各種団体の委員としての参画やイベントへのバザー出典参加を通してネットワークの充実に努める。先述したように広域連携については静岡県の取り組みに期待できる。



能登半島 お熊甲祭り ～素敵すぎる！！～

昨年から関わり続けているお熊甲祭りに参加した神戸大学の西山奈央さんの感想文です。

さて2年目のお熊甲祭り。「素敵過ぎる！」去年と変わらずそんな言葉ばかり口走っていたが、今年も何度その言葉を口にしかは分からない。「素敵」というのは形容詞の中でも、とても曖昧なものである。何がいいのかを表していないのだもの。でもそれは最上級！一言では表せない良さがぎゅーっと凝縮されている。去年の感想文を読み返すと女性が参加出来ないのは仕方ないなどと書いていた。が、今年は参加させてもらった。女性が力になることが出来ることに喜びを感じた。私は横見の集落で鐘を叩かせてもらったり四神器を持たせてもらったり、行列の一部として参加させてもらえた。響く鐘。それが私の出しているものなのだと思うと嬉しくて涙が出そうだった。掛け声の「そーれ！」という声にも力が入った。それ以外は男性陣の荷物持ちやご飯の調達係だったのだけれど、そのお仕事もそこそこに今年は縦横無尽に神社や道を走って色んな地域の杵旗を目に焼き付けて、猿田彦の踊りに魅せられ、あの雰囲気酔いしれた。杵旗勢ぞろいの時には感動して泣きそうになったし、小牧や横見の島田崩しは自分の体から出る限りの拍手を送った。一言で言い表せない「素敵さ」がそこにあって、それは確実に去年よりも大きくなっていった。

そういえば学生の受け入れにも賛成・

反対どちらの立場の方がいるということもうかがった。確かに休憩中などに太鼓を叩かせてもらうと反対の方には良い顔をされなかった。それは横見だけが、ということではなくどこに行っても一緒だろう。そりゃあそうだ。ぶらっと初めて訪れた来た学生なんかには信頼は出来ないだろうし何より祭りを大事にしているのだから。でもじゃあ両者が気持ちよく祭りに集えるにはどうしたらいいか。考え続けたけど答えは出ない。今のところはやっぱり通い続けて「怪しくないですよ」ということを分かってもらうしか方法を思いつかない。西岸の中での「結」を、地域の「結」、全国の「結」、社会の「結」にするために、信頼関係を結ぶために。私たち自身は面白いことを見つけてその地域に愛着を持つことがその原動力になる。都市と地方では生活に違いがある。それを分かった上で「おもしろい」ものを見つけたもの勝ちだなあ。と、こんな視点を持つのも私が4回生だから。一度知ると虜にするだけの魅力があってそれは人を捉えて離さない。私もまた例にもれずお熊甲ファンになった訳だけれど、本当に本当の話をすると就職すると仕事の休みも中々とれないだろうし、ましてや新入社員の1年目。来年は本当に来れるか分からない。でもお熊甲祭りは好きだから、神戸からのつながりも続いてほしい。そしてお熊甲祭りが素敵であり続けて欲しい。そのためには担ぎ手やそれ以外の部分で外部からの力も存分に利用して欲しいし…そのためには…と遠く神

戸から考えることでも尽きない。

まあこう感想文に書くと、それを見た後輩あたりがつながり続けてくれるかなあ…？と淡い期待を抱いておこう。ずるいなあ。私。



↑杵旗を担ぐ様子



→女性陣も行列に参加



↑みんなで記念写真

神戸の事務所で集めています！

被災地NGO協働センターでは、以下のようなものを集めています。活動の補助として使わせて頂いておりますので、お手持ちで使っていないものがありましたら、ご協力下さいますようお願いいたします。

◎テレホンカード（未使用のもの）

家や職場で眠っているテレホンカードはありませんか？最近では携帯電話の普及で出番が少なくなった、という方も多いかもしれませんが。当センターでは、こうしたテレホンカードを集めて、出張時の通話や一般回線の通話料の支払いなど、電話代の補助として利用させていただいています。集めているのは未使用のものです。

◎未使用ハガキ・書き損じハガキ

みなさまのお宅では、使わなかったハガキや書き損じのハガキはどんなさっているでしょうか？こうしたハガキは郵便局で手数料を支払えば交換してもらえるのです。年賀状の余りなどございましたら、お送り下さい。

◎「一本のタオル運動」

今でも電話でお問い合わせを頂きますが、以前から呼びかけている「一本のタオル運動」、現在も継続しております。集めているのは新品の浴用タオルで「まけないぞう」の材料となります。一部は災害救援時の資材としても還元しています。

佐用町

佐用町の山を守ろう!～山林整備プロジェクト～

昨年8月の水害以来、当センターでは佐用町の復興に向けて活動を展開してきました。水害直後から炭を床下に入れる活動をはじめたのですが、実は佐用町はもともと竹炭づくりが盛んな土地なのです。そこで当センターも、昨年からは佐用町の竹炭組合の方の教えを受けながら竹炭を作ってきました。その過程で若い大学生が積極的に関わりを持ってきています。そういった若い人達と関わることで、竹炭組合の方達も元気を取り戻しているように見えます。さらには、阪神間の大学生だけでなく、地元佐用に住む大学生も参加をしてくれており、改めて自分の地元である佐用町の魅力を再発見しています。また、その竹炭づくりから話が広がり、2月には竹炭祭りというお祭りをする事も決定しました。このお祭りでは、大学生などによる竹炭のコンテストも実施する予定で、準備段階として竹を切り倒し、細かく切り分ける作業を進めているところです。

また、足湯隊も佐用町に通い続けています。佐用町の郵便局でも日曜日に場所を使わせてもらい足湯をしています。この郵便局での足湯は定番になりつつあり、地元の人でも常連さんばかりになってきました。郵便局で足湯をすることが定番となれば、災害が起きた時にどこの町でも郵便局はあるので、すぐに足湯をすることが出来るようになるのではないかと思います。また、地域のふれあい喫茶などでも足湯を実施していますが、「足湯があるから出てきた」という住民の方もいるくらい人気を博しています。



竹林で作業をするエコさん(左)
足湯隊の活動の様子。この日は地域のふれあい喫茶で足湯をしました。(右)

さて、10月23日からいよいよ山林整備のプロジェクトがスタートしました。これから本格的に山に入っていくことになります。

佐用町の水害の一つの原因として山の管理がずさんであったということがあげられています。戦後、政府の政策で山に杉や檜などの針葉樹がたくさん植えられました。住宅事情があったとはいえ、本来の山の植生を無視して、商品としての価値が高い木をたくさん植えたのです。しかし、外国の安い木材がどんどん輸入され、林業に携わる人も少なくなってきました。その結果、間伐がされず木の根が張らないので、ちょっとした風や雨ですぐに木が倒れてしまったり、山全体の保水力が低下してしまいます。ひとたび台風などが来ると、たちまち風倒木が流れ出て麓の町に甚大な被害を及ぼします。また、川の下流域にある都市部で安全な生活ができるのも、上流の山がしっかりと役割を果たしてこそと言えます。関東では、自分達の飲んでいる水の水源は山梨県にあるから山梨の山を綺麗にするんだ!と言って活動をされている所もあります。

佐用町では2004年にも台風の被害を受けました。その時に山の木がたくさん倒れてしまったのですが、それを放置していました。今回の水害では、その時の風倒木が流れ出て大きな被害をもたらしたとの指摘もあります。住民の方も山を管理する重要性には気づいているものの、なかなか手が回せないという状況です。こういった山の状況は佐用だけに限らず日本の山全体が抱えている問題であると思います。

当センターでは、(社)国土緑化推進機構の「緑の募金交付金による事業」であり、毎日新聞社の「つながる森プロジェクト」の一環としてキャンペーン協力を頂き、山林の整備活動をはじめました。山自体は荒廃しているという表現がしっくりするほど荒れているのですが、同時に先人が一生懸命に植えてくれた、財産である木々もたくさんあるわけです。こうした木々を地元の人と外部支援者である我々とが連携をして守っていく活動を展開していく予定です。



切り倒した木をチェーンソーで細かくする作業の様子。簡単に見えて意外と難しいんです。木をおさえて座っているのが村井さん。

10月23日には、実際に山守さんと一緒に佐用町奥海(おねみ)という地区の山に入り、山守さんにレクチャーを受けて来ました。大きな木の伐採ともなると素人ではとても手が出せない危険な作業なので、一つ一つ教えてもらいながら作業を進めます。安全管理にも十二分に気を配らなければいけません。山守さんは76歳の方なのですが、我々よりはるかにフットワークや身のこなしは軽く、目をシロククさせてその勇壮な振り舞いを眺めていました。実際にチェーンソーを使って我々も伐採にチャレンジしてみたのですが、やはりなかなか上手くはいきません。結局この日は3本の木を切っただけで活動終了となりました。

こういった活動ですぐに劇的に山が甦るということはありません。とりわけ佐用町奥海に、私たちが山林整備活動という形で入ったところでどれほどの効果が見込まれるのか正直、「2階から目薬り」どころか「超高層ビルの上から目薬り」ということかも知れません。でも、誰もそのように考えていたら何も変わらないでしょうが、一人二人と少しでも山と向き合う人たちが増えてくれば、きっと山は蘇ると確信できます。ほんとに「塵も積もれば山となる」の構えで関わり続けたいと思っています。是非読者の皆様も一度、空気の良い佐用町奥海で、汗をかいてチェーンソーの音で日頃の鬱憤をほらし「もう一つの世界」に浸ってみませんか?

(参考:～佐用からの現地レポート～山林整備編、文責:頼政良太)

<寺子屋セミナー10周年企画>

「不良」ボランティアが社会を変える

寺子屋セミナー 「減災サイクル」

～減災サイクルの具現化に挑戦！ボランティアが担う減災活動とは？～

主催：被災地NGO協働センター

協賛：神戸大学学生ボランティア支援室(第3回は共催)、末村祐子(大阪経済大学客員教授、生駒市行革推進委員長、平成22年度大阪市事業仕分け仕分け人)、田村快光(持宝院住職)、特定非営利法人日本災害救援ボランティアネットワーク、橋口文博(特定非営利活動法人じゅうしん神戸事務局長)、特定非営利活動法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク、特定非営利活動法人ゆめ風基金

(50音順/2010年9月16日現在)

阪神・淡路大震災から15年が経ちました。阪神・淡路大震災とその後の各地での災害から学んだ、助け合い、学びあいの実践を受けて、政府は防災白書(2010年度版)で、「新しい公共」の力を活かした防災力の向上を打ち出しています。

さて、被災地NGO協働センターは2000年より、災害から学ぶ地域防災や豊かな社会づくり、国際協力、地域経済の活性化といったテーマで「寺子屋学習会」を継続してきました。この度、15年間の経験をもとに災害を減じるための「智恵」づくりを目指し、2007年12月より提言している「減災サイクル」を徹底して学びたいと思います。

災害が多発する昨今ですが、総合的に災害を減じるための「智恵」を構築するには、災害直後の応急対応期だけの課題に集中するのではなく、その後の復旧・復興期にも生じる多大な課題に対しても向き合わなければなりません。そして何よりも日ごろの備えがもっとも大切で、これについてもすでに様々な取り組みがなされています。そこから出てきた課題にも向き合い、減災のための活動にさらに重点をおかなければなりません。

そのためにはまず、いのちの大切さや社会における関係性の豊かさにこだわる必要があるでしょう。経済学者である中村尚司さんはその著書『地域自立の経済学』(日本評論社、第2版、1998年)で、「人間生活の豊かさは、循環性の永続、多様性の展開および関係性の創出に支えられている」と書いておられます。

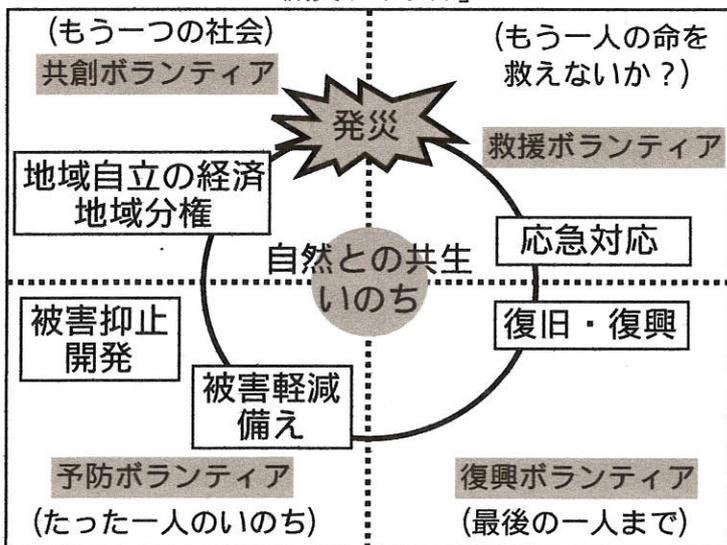
災害を減じるため、「減災サイクル」を実践する「智恵」を徹底的に学びます。多数の方のご参加をお待ちしております。

※1口1000円(1年分)で協賛を募集中です。

※このセミナーは以後シリーズとして継続する計画で、第2回シリーズは2011年1月からを予定しています。



「減災サイクル」



(C)被災地NGO協働センター作成(2007年12月5日)

第1シリーズ(全4回スケジュール)

第1回:「減災サイクル総論/もう一つの社会」

…9月15日(水)

終了しました!

講師:渥美公秀さん

大阪大学大学院人間科学研究科教授

(特活)日本災害救援ボランティアネットワーク理事長

第2回:「応急対応」…10月27日(水)

終了しました!

講師:黒田裕子さん

(特活)阪神高齢者・障害者支援ネットワーク理事長

(特活)日本災害看護支援機構副理事長

第3回:「復旧・復興」…11月29日(月)

講師:村井雅清さん

被災地NGO協働センター代表

第4回:「事前の備え」…12月5日(水)

講師:橘高千秋さん

(特活)ゆめ風基金事務局長

※ぞう通信は今回はお休みさせていただきます。申し訳ありません。

※1997年以来13年間支援をしていただいている全日本仏教婦人連盟よりご寄付をいただきました。